

2023年度 文化的多様性を持つ構成員交流会「落語を楽しむ会」

“楽”語体験ワークショップ



ダイバーシティ推進室では、例年、主に留学生や外国からの研究者を対象に、日本文化の体験を通じて交流の機会を提供する「文化的多様性を持つ構成員交流会」を開催しています。今年度は、国際センターが行っている「日本語・日本事情短期集中コース」のワークショップをダイバーシティ推進室と共催する形で、落語を体験する会を開催しました。

日本語・日本事情短期集中コースの参加者をはじめ、多くの参加者が積極的に手を挙げ、高座に上がって自己紹介をした後に、簡単な話を演じたり、実際に所作を演じてみたりするなど、ちょっとした噺家気分を味わう体験を行いました。中には「餅がのったそばを食べる」という難度の高い所作にチャレンジする参加者もあり、会場は大いに盛り上がりました。

前半は国際交流会館の大会議室において、日本語・日本事情短期集中コースに参加している留学生を対象に、ダイバーシティ推進室の藤山が講師となり、落語の概要や大まかな歴史について案内しました。

その後、小柳師匠が「長短」という噺を一席演じました。気の長い人と短い人がやり取りするユーモラスな噺の中には、先ほど学んだたばこを吸う所作やまんじゅうを食べる所作もあらわれ、客席からは笑い声が上がりました。

後半は会場をTMUギャラリーに移し、落語芸術協会所属の春風亭小柳師匠による落語ワークショップを実施しました。まず、一人で複数の人を演じ分けるために「上下を切る（左右を向きながら話すこと）」といった落語の形式や、扇子と手拭いという小道具の使い方といった基本的な事柄について、小噺や実演を交えながらの解説が行われました。続いて、「所作」と呼ばれる、落語を演じるうえで用いられるしぐさの実演と解説があり、そばやまんじゅうの食べ方、たばこの吸い方など、いくつかの所作が示されました。その後、小柳師匠の呼びかけで、希望者が高座に上がり、簡単な小噺や所作を実際に体験する時間が設けられました。

上演後、師匠との質疑応答の時間が設けられました。「小柳師匠が噺家になったきっかけ」や「寄席（よせ）の語源について」といった質問のほか、「落語において『おもしろい』とはどういうことか」といった質問も寄せられ、参加者の関心の高さがうかがえました。こうした質問に、小柳師匠は誠実かつユーモアを交えて回答していただき、盛況のうちに閉会となりました。

今回は、国際センターが行っている「日本語・日本事情短期集中コース」のワークショップと共催したことで、これまでなかなか広報が届きにくかった留学生の参加が多数得られました。今後も引き続き、こうした形での協働を継続するとともに、留学生と学生やプレミアムカレッジ生との交流の機会なども提供できるよう、運営に工夫を重ねていきたいと思っています。（藤山）



Contents

- 1 2023年度文化的多様性を持つ構成員交流会「落語を楽しむ会」
- 2 第2回バリアフリー講習会「発達障がいと学び～高校までとこれから～」
寄稿「ダイバー室と私の9年間」
- 3 バリアフリーチェック・言葉の地図
2023年度学生支援スタッフ活動の総括
コラム「ダイバーシティとスポーツ」
- 4 ダイバーシティ&インクルージョン関連科目の紹介
セクシュアル・マイノリティ教職員研修
東京都立大学一時保育施設「都立大KIDS」
コラム「ダイバーシティ・ブックレビュー」

ダイバーシティ & インクルージョン 関連科目の紹介

以前より学際的な学びとして、様々な領域においてダイバーシティ推進について学ぶことの必要が指摘されてきました。それは医療や社会科学などの人に関する学問領域のみならず、今まさに社会において求められる領域の一つです。
 そうした状況を踏まえ、ダイバーシティ推進室ではこの度、既に本学の全学共通科目の中で行われている講義の中から、新たにダイバーシティ推進に関連する科目を取りまとめた「ダイバーシティ & インクルージョン関連科目」を選出しました。

こうした取組は全国的にもいくつかの大学において既に行われつつあるものですが、専門科目に加えてこうしたダイバーシティに関する学びを深めることは、「それぞれの領域×ダイバーシティ」を考えるうえで非常に重要な学びとなります。関心のある方は、ぜひ当室HP (https://diversity.fpark.tmu.ac.jp/topix/topix_94.html) より内容をご確認ください。（益子）



セクシュアル・マイノリティ 教職員研修

教職員を対象として、セクシュアル・マイノリティに関する研修を行いました。ダイバーシティ推進室の藤山が講師となり、基礎的な知識や、教育の現場で当事者が体験しがちな困難、大学における対応の原則と留意したい点などを解説しました。参加者からは、「自身の担う業務に活かせる情報を知ることができ、大変勉強になりました」「普段の行動に良い影響を与える内容だと思います」などの感想が寄せられた一方、「導入から最終フォローまでの事例紹介のようなご紹介をいただける機会があるとさらにイメージしやすく、実務にもつなげやすいと感じた」など、より具体的な対応事例を求める意見も寄せられました。
 頂いたご意見を参考に、今後も引き続き、研修等の活動を行っていききたいと思います。（藤山）

東京都立大学一時保育施設 「都立大KIDS」



今は使う予定がなくても、勤務の都合や保育園の都合などで急遽1日だけ利用したいというケースにも対応できるのが、一時保育施設「都立大KIDS」。実際の保育のようすや疑問などを直接施設の先生方に聞くことができる、施設見学会やお試し保育は、随時行っています。
 また、2023年4月より、南大沢キャンパスで開催される学会などに参加する学外の方にもご利用いただけるようになりました。これまで、複数の学会の参加者にご利用いただいています。
 施設見学会やお試し保育、学会での利用など、詳細は学長室またはダイバーシティ推進室までお問い合わせください。（https://diversity.fpark.tmu.ac.jp/day_nursery/day_nursery.html）（藤山）

コラム ダイバーシティ・ブックレビュー（東京都立大学管理部長：井上卓）



梶木 蓬生 著 『水神』 上・下 新潮社

ダイバーシティの概念は、時代と共に変わってきているのでは、と思いつつ、一方で、人々の内心には、太古の昔からダイバーシティの思いが埋め込まれているのでは、とこの小説を読み終えたときに感じました。
 小説の舞台は、江戸時代の久留米藩（福岡県）。筑後川という大河の側にありながらも、水利が悪い地にある農民達は、一日に数えきれないほど、川から水をくみ上げる重労働を強いられていました。当時は、「土農工商」といった身分制度のもと、農民は、武士と対等の関係性になく、窮状を受け止めてもらえず、生きづらさを感じていたのではないのでしょうか。農民達は自らの意思で、堰を作り、水を引こうと奮闘した姿が、史実をもとに描かれています。艱難辛苦を伴う作業であったばかりか、万が一事故が起きた時には、農民達を率いる五人の庄屋が死をもって償うことまで、武士に約束させられます。一方で、農民達の苦勞しながらも将来のために懸命に生き抜こうとする姿を、敬意の念を持って見守っていた一人の老武士がいました。堰作りは順調に進むも、大きな事故が起きてしまい、五人の庄屋が責任を取らざるを得ない事態に至ります。そのときに、老武士は、藩主に対し、自らの自死をもって五人の庄屋の助命を嘆願し、切腹を果たします。庄屋、農民達はそのことを知るに至り、未代までその老武士を称えることとし、今も現地には碑が残っています。
 ややもすると、人は、自らと他者とを区別、差別するという行動を無意識に取ってしまう反面、人のDNAには、人をリスペクトするという思いも内包されているのではないのでしょうか。だからこそ、リスペクトする思いを日々顕在化することが大切なのだと思います。

編集 後記

ダイバーシティ推進室で広報デザインの仕事をすることになって、自分の中にあつた小さな炎がぐっつきりと形になって見えてきたように感じます。支援にたずさわってくれている学生たちも、自分の中にある炎を大きく育てて、社会へ羽ばたいて行くのでしょうか。（兼子）



東京都立大学 ダイバーシティ推進室
 〒192-0397 東京都八王子市南大沢1-1 図書館本館1階
 電話：042-677-1337（直通）／内線2571
 E-Mail：diverwww@tmu.ac.jp
 URL：https://diversity.fpark.tmu.ac.jp/
 発行日：2024年3月22日
 編集・発行



第2回バリアフリー講習会「発達障がいと学び～高校までとこれから～」



今回の講習会では、「発達障がいと学び～高校までとこれから～」というテーマで株式会社Grow-Sの濱野 智恵氏にお話をいただきました。障がいのある学生の入学は年々増加傾向にあります。そうした中で、彼らが有する障がい特性も年々広がりを見せており、多種多様な困りごとを抱えた学生が入学してきています。例えば、一見同じような障がい程度と思われる学生の中にも、授業支援を活用する学生と全く活用しない学生がいることなどに違いとして現れます。こうした異なる支援ニーズに合わせ、彼らの支援を検討するうえで、障がいのある学生の大学入学以前の様子を理解することが大きく役立ちます。彼らが高校までの生活でどのような過ごし方をしているのか、そして何に躓きがちなものであるのかを理解することは、私たちが彼らの支援ニーズをよりよく想像するうえで必要です。そこで、当日は濱野氏に「発達障がい×学び」に焦点化しつつ、以下のようなお話をいただきました。

濱野氏のお話では、都立高校で行われている発達障がいのある高校生の支援に関する取組の紹介や、中・高生の彼らが周囲とのコミュニケーションなどで課題に感じていることについて紹介されました。その中には、発達障がいについて、障がいはなく、発達の「違い」であるという視点や、「時間割が急に変わるとびっくりする」といったことや、「自習で何をしようかわからないので、具体的な課題を出し

てほしい」といった困りごとを抱える生徒や、「独り言が多いけれど、頭の中で整理しきれなかった情報を確認している状態なので気にしないで」「パニックになっている時には「どうしたの!?!」「大丈夫!?!」と言われるとさらにパニックになってしまうので、何事もなかったかのように話を続けて」といったリアルな姿が浮き彫りになるお話でした。

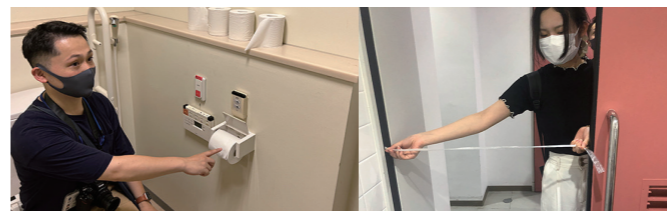
ご講演後の参加者の感想では次のようなものがあげられました。「様々な価値観の方が世の中にはいるので、どのような方にも順応できるようにしたいと思い受講しました。過去にどうしてこんな発言・行動をするのだろう、と疑問に思ったことがあったのですが、このような思考回路でこの発言をしたんだということが分かった気がします。定期的に開催していただけて大変嬉しいです。」「発達障害について、特に教育の面から考えることができても良い機会となりました。私は教職課程を履修しており、特別支援教育に関する授業も受けています。支援が必要な児童や生徒が近年増えていることを聞き、仮に将来自分が教員になった時どのように接したらよいのか考えていたため、濱野さんに具体的な支援を行う上で意識すべきことをお話していただけてとても参考になりました。ありがとうございました。」「発達障がいのグレーゾーンの方への接し方について学びたいです。大学には行けて、仕事もできますが、込み入った話し合いの場での意思疎通が難しい方などです。どこから発達障がいまでが性格と捉えたらよいのか難しく、周りでも性格と捉えている人もいれば、発達障がいと捉える人もいます。そういった方への対応と、発達障がいグレーゾーンの方ご自身の心構えも学びたいです。」など、濱野氏のご講演をきっかけに今まで以上に発達障がいのある学生たちへの想像力が高まる様子が見られました。

今後も発達障がいだけでなく、様々な障がいのある学生の高校までの様子について講演会を行っていききたいと思います。(益子)



「ダイバーシティと私の9年間」
 思えば私とダイバーシティとの付き合いも9年間というなかなかの時間になりました。9年間のうち、最初の半年は支援を受ける学生として、そしてその後は障がい学生兼支援スタッフの一員として、という具合でした。
 このような形でダイバーシティと関わるようになったのは、前任の障がい支援担当の横山さんとの出会いが大きかったように思います。学部1年の10月、横山さんと初めて会ったその日に、「自分も何かの形で支援に携わりたい」という話をしました。
 そして、この時の話をきっかけに、学内者向け勉強会で視覚障がい者としての経験や状況を発信する場を作っていたことができ、その後も、学生向けの授業やアメリカ留学の報告会、そして中学校での出前授業など形を変えながら大きくなり、今まで多くの人に自身のことを知ってもらう機会を得ることができました。
 また、学生支援スタッフとして、バリアフリーマップの作成や動画の文字起こし、よりよい支援の運用の在り方を皆で話し合うなど、いつの間にかダイバーシティが一つの居場所になっていました。そこでは、一生の付き合いになるであろう友人もたくさんできました。
 今回の皆さん、そしてこれからやっていく全ての皆さんにとって、それぞれに過しやすいダイバーシティがこれからも続きますように。9年間ありがとうございました。
 障がい者支援スタッフ
 理学研究科数理科学専攻
 博士後期課程3年 築島瞬

バリアフリーチェック・言葉の地図



バリアフリーチェックは一昨年から始めて第三回目の取組となりました。今回の取組では、第一回目の調査の時と同様に1・6号館に加え、講堂のチェックを行いました。チェックの際には第一回目の時の調査では十分に確認できなかった点についてチェック項目を改めることで確認することができました。

チェック作業では、バリアフリートイレや各棟のエレベーターを中心に確認をしました。例えば、「左側にウォシュレットのスイッチがあり、右側にトイレットペーパーがある場合、麻痺がある人はどうしたらいいんだろう」「このトイレは大型の車いすなら通れないのではないかなど」と話しながら調査を続けており、普段とは異なった目線で大学の敷地を歩くということに新鮮さを感じる学生もいました。

また、言葉の地図の作成も実施しました。言葉の地図とは、視覚障がいがある方などの地図を視認することが難しい方に対応するため、目標地までの経路についてテキストデータで提供するものです。例えば「南門から6号館まで、徒歩およそ4分、距離およそ228メートルの道案内を行います」といった情報を冒頭に伝達した後に、各道順を「のぼり階段を12時の方向へ10段のぼると、点字ブロックの曲がり角があります」「10m先の警告ブロックを右折すると〇〇があります」といった情報を点字ブロックを中心として描くことで、視覚障がいのある学外からの来訪者が大学の施設を利用する時に特に大きな意義があります。この言葉の地図のデータについては、本学のキャンパスマップ (https://diversity.fpark.tmu.ac.jp/people_with_disabilities/textmap.html)



からも閲覧可能となっています。今後もこれらの施設のチェックは継続していく予定です。学内でご関心のある方がいらっしゃれば、ぜひキャンパス内のチェックをご一緒して、普段とは違う視点を身に着けてみませんか？(益子)

2023年度学生支援スタッフ活動の総括

今年度の学生支援スタッフの活動は学内での活動のみならず、学外での交流や学びも充実させることができました。学外での交流を中心とした取組では、高尾山登山やBBQなどを行いました。次に学習を中心としたものでは、他大学やろう学校、そして発達障がいのある学生への学習塾を見学しました。こうした学習の場は、多くの学生支援スタッフにとって、障がいのある人たちのリアルな生活場面を垣間見る貴重な経験となりました。参加する学生の中には教職課程やリハビリを専攻する者もいました。

この他にも、体験型の学習及び交流の機会として、江の島観光体験を行いました。この体験は参加者の多くが長時間車いすを押したり、座ったりする経験が無い中で、実際に車いすを使用して電車に乗り、外出することで新たな眼差しを獲得する事を目的に行いました。こうした一つ一つの体験は、日常の彼らの生活を別の観点から見つめ直すことに繋がるだけでなく、日々の街中を歩くときの視点にも変化をもたらすことができます。障がいのない人と比較し、障がいのある人たちの生活が果たしてどういったところで不便さを伴うのか。どうしたらそれを回避することができるのか。こうした想像力の獲得はダイバーシティ推進を図る目的以外にも、彼らに実りの多い気づきを与えてくれるものと思います。

実際にこうした取組による効果は、学生支援スタッフの学内での活動にもポジティブな影響を与えたと思われます。例えば、パソコンの派遣数が前年比でも数倍となったことから、人材養成の1年ともなりましたが、「聴覚障がいのある学生が何を望むのか」「支援をする上ではどんなことを大事にしたいのか」等といったことについて彼らが考える姿勢からは、例年以上に真剣さが強く表れていました。また、バリアフリーチェックや言葉の地図を作成する活動においても、これまで以上に熱心に取り組む姿勢が現れていました。

次年度もこれらの体験は継続して行っていききたいと思えます。関心のある方がいらっしゃればぜひ一緒にご参加されてみませんか？(益子)



コラム

ダイバーシティとスポーツ 「トランスジェンダー・アスリートの参加をめぐって」③

トランスジェンダーの女性選手の競技参加をめぐり、国際オリンピック委員会(IOC)は2021年11月に10項目のポリシーを発表し、各競技団体がこれに基づいて参加のためのルールを作るよう要請しています。これを受け、2022年6月に国際水泳連盟が、エリートレベルの国際大会については、男性の思春期を経験した場合は女子競技への出場を認めないことを決定しました。これに続き、陸上競技やラグビー、自転車競技など多くの国際競技団体で、トランスジェンダーの選手が女性として競技に参加することを認めない措置がとられています。
 性別による排除も取れるような動きが広まる一方で、国内レベルに目を転じてみると、フランスラグビー連盟がすでに2021年5月にトランスジェンダー女性の競技参加を認める判決を全会一致で可決しているように、包摂的なルール作りに取り組んでいる組織もあります。アメリカフencing連盟(U.S.A.F.)はさらに一歩踏み込んだ形で、「トランスジェンダー・ノンバイナリー・アスリートポリシー」(注1)を策定し、出生時に割り当てられた性別に関わらず、性自認/性表現に沿った形でU.S.A.F.が公認する大会に参加することを認めています。
 競技特性により、こういったルールが望ましいかは異なるでしょう。しかし、IOCのポリシーに明記されているように、何よりも包摂的なルールであることが求められています。自身が望む性別での競技参加を実現すること、競技の公平性を保つことは決して対立するものではありません。包摂的なルールを作るために、競技関係者はもとより、スポーツに携わるすべての人が知恵を出し合うことが、いま強く求められています。(藤山)